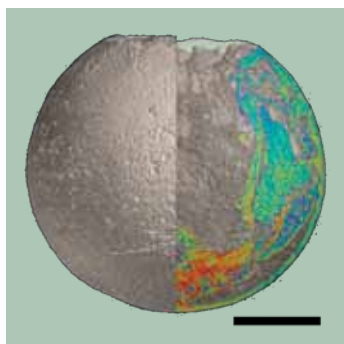
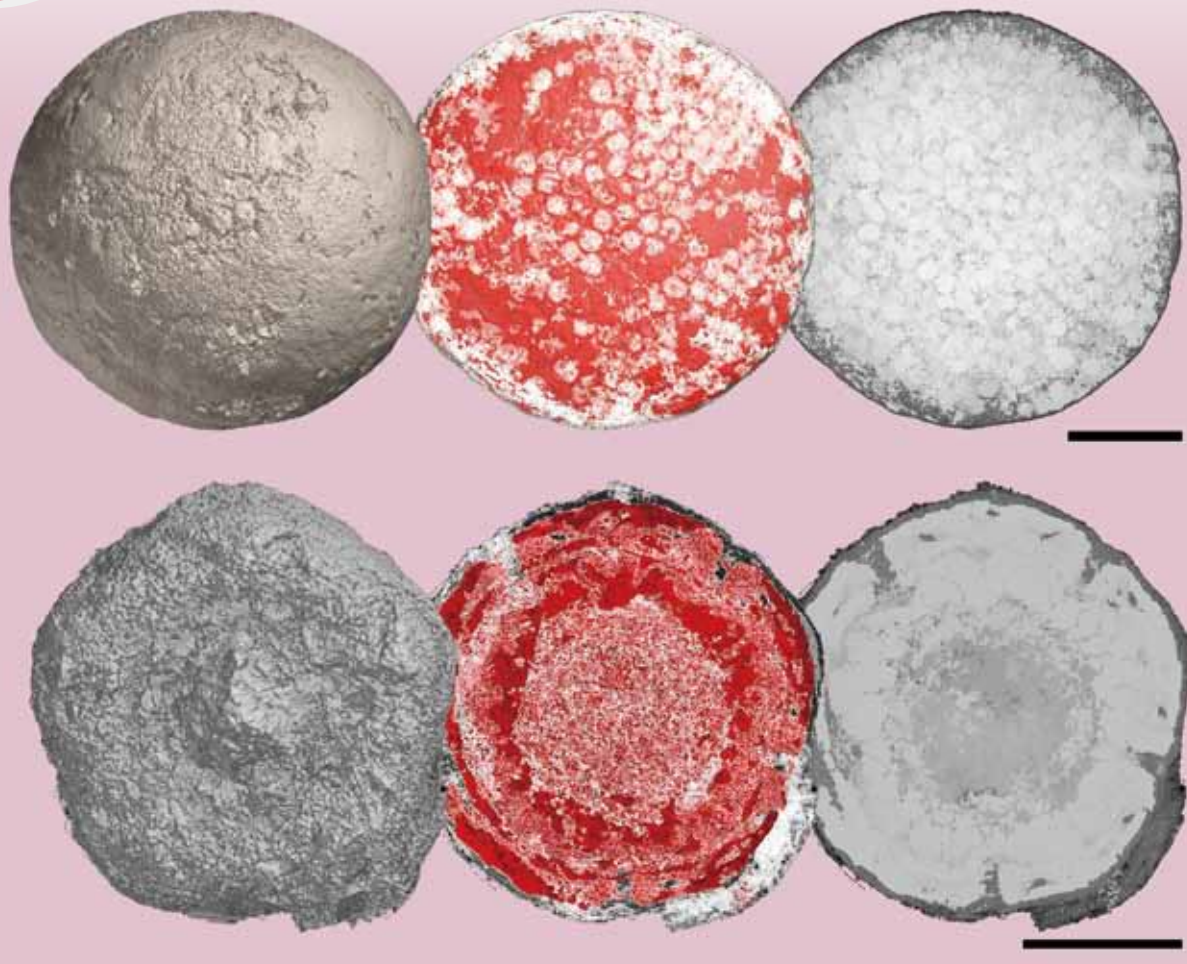


omnividens

【オムニヴィデンス】



多細胞動物胚化石

中国貴州省の約5億7000万年前(上段)、陝西省の約5億3000万年前(下段:中国西北大学標本)の地層から、リン酸カルシウムに置換された保存のよい多細胞動物の胚化石が見つかります。いわゆる「カンブリア爆発」という生命の進化史においてたいへん興味深い時期における動物胚の発生情報ということで大きな関心を集めています。しかし、その大きさが1 mm以下と微小なことが研究を困難なものとしていました(スケールは200 μm)。化石内部の立体的で複雑な構造(左:表面、中、右:内部構造)を可視化できる最新のマイクロX線CTなどの3次元コンピュータ技術は発生古生物学研究の強力な手段となっています。

(右: 陝西省産胚化石: 中国西北大学標本)

2015.3
NO.

47

SMMAミュージアムユニバースに総合学術博物館とみちのく博物楽団が参加しました

はじめに

2014年12月19日(金)、20日(土)にせんだいメディアテーク1階オープンスクエアを会場として「SMMAミュージアムユニバース～すてき・ふしぎ・おもしろい～」が開催されました。

これはSMMA参加館が年に一度集合して、トークやイベント、体験の広場などをつくり、市民の方々にミュージアムの楽しさを知って、学んでもらうきっかけにしようというコンセプトの催しです。今回で3年目を迎え、総合学術博物館とみちのく博物楽団も引き続き参加しました。

今回は、「SMMAのイベントはいつどこで」という事前の問い合わせがあったり、また、「何々館の体験コーナーはどこですか」というご指名来場者があって、催しが着実に浸透してきたことを印象づけました。平日と休日にまたがったものの、2日間の来場者数は、昨年を大幅に上回る1,768名となりました。

総合学術博物館は「トークとイベントの広場」にて、小川知幸助教が「古代ローマのふしぎ～パクス・ロマーナ～」、みちのく博物楽団は「体験の広場」にて「フィールド顕微鏡で見る小さな世界」、またSMMA企画の「ミュージアムっておもしろい～大学生の活動紹介～」にて、藤岡

大団員が総合学術博物館を拠点にした、みちのく博物楽団の活動を紹介しました。その他、「展示の広場」とミュージアムショップでも、団員を含めた学生たちが大いに活躍しました。以下ではそのようすをご紹介します。(小川知幸)

フィールド顕微鏡で見る小さな世界

まず「体験の広場」では、手のひらサイズの携帯顕微鏡「フィールド顕微鏡」(向井康夫団員考案・開発)を使って、水の中の小さな生きものを観察するワークショップをおこないました。

参加者のみなさんには、地底の森ミュージアムの池から採集してきたフタバカゲロウやケンミジンコ、イトミミズなど計5種類の生きものを観察してもらいました。いずれも身近な田んぼや池に棲んでいる生きものですが、動いている姿をすみずみまで観察したのは初めてだったようで、「わあ、すごい、動いてる」と、子どもさんも大人の方も目を輝かせて観察していたようでした。

今回は観察だけでなく、生きものの形や色、動き方などから共通の特徴を見つけだし、生きもののグループ分け(分類)をして、そのグループの名前もつけてもらいました。この“得られた共通の特徴からグループを作り命名する”という一連の流れ



顕微鏡で見たヒラタカゲロウの仲間

は現在の研究者もおこなっている分類法で、これが分類学・生物学の基礎にあたります。ユスリカの幼虫とイトミミズはどちらも細長い形をしているため、同じグループにしている方々が多くおられました。しかし、分類学上は、イトミミズがユスリカを含めた他の4種類とはまったくことなるグループに属し、そのことをみなさんに伝えるとかなり驚いたようすでした。

他にも、みちのく博物楽団活動報告パネルや南三陸で採集されたアンモナイトなどの実物化石を展示して解説しました。また、フィールド顕微鏡は観察キットとして、会場のミュージアムショップで販売しました。(藤岡 大)



フィールド顕微鏡で生きものを観察中



観察した生きものを分類して答え合わせ



古代ローマのふしぎ～パクス・ローマーナ～の小川助教



藤岡団員による大学生の活動紹介

古代ローマのふしぎ～パクス・ローマーナ～

「トークの広場」では、今年のテーマが「ふしぎ」ということで、19日には飼育動物のふしぎ、遺跡のふしぎ、ミュージアムのふしぎ、などのお話が各館より持ち寄られました。総合学術博物館では、歴史学の観点から「ふしぎ」とおもわれる古代ローマの戦争と平和の話をしました。トークコーナーは年々、イベントがリアルタイムに進行している臨場感を出すために重要な役割を果たすようになって、今年は会場の玄関近くまでせり出してきました。テーマは少し大人向け、とおもっていましたが、若い方から年配の方まで、思いがけずたくさんの方々に聴いていただくことができました。とくに女性が多かったことに驚きましたが、参加していただいた方にはあらためてお礼申し上げます。その概略はトークレビュー(次ページ)に掲載します。(小川知幸)

ミュージアムっておもしろい～大学生の活動紹介～

20日には、わたしがみちのく博物楽団でどのような博物館支援活動をしているかを高校生・大学生向けに紹介し、おもに、被災地復興支援を絡めた活動企画である南三陸フィールドミュージアム・プロジェクトの「田んぼのいきもの」と「トリアス・ワールド」についてお話ししました。

「田んぼのいきもの」は、フィールド顕微鏡などの観察キットと向井康夫団員の著書『絵解きで調べる田んぼの生きもの』を使って、南三陸町の田んぼや池に棲んでいる水中の生きものを分類、種の同定をして、身近な生きものの複雑な生態系の存在や分類学の基礎を学んでもらおうというものです。

子どもたちに教えるだけでなく、教える立場の方にも教授して、被災地の方々だけでもイベントを開催できるよう支援していることを伝えました。

また、「トリアス・ワールド」は、南三陸町に分布する中生代三畳紀の地層から産出するアンモナイト等の化石を発掘・調査することで、郷土の生い立ちや生命の営みを学んでもらおうというものです。実際の化石発掘調査の作業写真をまじえて紹介しました。

話し終えて、わたしの感じている博物館支援活動のおもしろさややりがいがいまぐらく伝わったかどうか少し不安でしたが、トークを聞いてくれた大学生から、「どのようにしたらみちのく博物楽団に入ることができるのでしょうか」という質問が最後にあり、興味をもってもらえたことをうれしくおもいました。

また、トークに参加した宮城教育大学天文同好会やこども☆ひかりプロジェクトで活動している大学生とも交流をもつことができ、とても貴重な経験になりました。

(藤岡 大)

(写真=小川知幸・小川かおり)



大人も楽しめるワークショップ



南三陸で採集された化石の展示と解説



ショップの顕微鏡に興味津々

トークレビュー： 古代ローマのふしぎ～パクス・ロマーナ～



東北大学
学術資源研究公開センター
(総合学術博物館) 助教
小川 知幸

PROFILE

(おがわ ともゆき)
1970年生まれ
専門：ヨーロッパ中世・
近世史、資料論
出版：メディア論

「ローマの平和」とは何か

パクス・ロマーナ (Pax Romana) とは、ラテン語で「ローマの平和」の意味である。どこかで耳にしたことがあるかもしれないが、一般的には、紀元前 27 年にアウグストゥスが帝政を樹立したときから五賢帝時代まで続いた、およそ 200 年間のローマ帝国の最盛期を指すことばである。

しかし、その場合の「平和」とは何を意味するのだろうか。同じ時代をいきた歴史家タキトゥスは「アグリコラ伝」のなかで、「ローマ人は掠奪し、強奪することを支配と呼び、無人の野をつくとそれを平和とよぶ」などと述べている。われわれが考える平和とは大きくことなるものであったのではないだろうか。

重装歩兵としてのローマ市民

ローマには、特定の戦士集団があったわけではない。よろいかぶと、盾や剣など、必要な装備を自弁することのできる市民(資産家や農夫)が、「重装歩兵」として戦闘に参加したのである。

かれらは「百人隊」(Centuria)を構成して、ローマ人全体の利益と栄光のために戦った。これは紀元前 5 世紀ころからの大きな変化であり、その後 1000 年近く、ローマ人の戦法の基本となった。「戦う市民」は、平時にも政治的な発言権を強め、ついに王を追放してローマの共和政を築きあげた。

その戦法は、ローマの兜(ガレア)や投げ槍(ピールム)などの装備からもわかる。兜は耳の部分が開いていて、兵士が司令官の号令により一斉に行動できるようつくられていた。戦列が敵陣から約 30 メートルにまで近づくと、兵士は 2 本の投げ槍をつぎつぎに投げ、敵を仕留めないまでも、相手の盾を使いものにならないようにした。

そしておもむろに剣(グラディウス)を抜いて突進し、自分の盾の突起で相手の顔面を殴打すると、ひるんだ敵めがけて剣を突き立てたのである。これがローマの集団戦法(ファランクス)であった。戦列は、新兵、中堅、古参の兵の順に、3 重になっていた。戦闘は、敵が二度と立ち上がれなくなるまで続いた。



古代ローマの兜(ガレア)

このように、市民軍を擁したローマでは、軍への参加は市民のたいせつな義務でもあった。人生のなかで最低 16 回は従軍しなければならず、重大な軍紀違反、とくに戦闘中に違反(敵前逃亡など)した兵には死刑が待っていた。それだけでなく、同じ部隊兵の 10 人に 1 人が処刑されるという連帯責任まで負わされた。

とはいえ、これを補ってあまりある名誉が、凱旋式での喝采であり、黄金の花冠、あるいは月桂冠の授与であった。観衆の拍手喝采のなかで、おごそかに月桂冠を授けられる名誉がいかに大きなものであったか。その伝統は現代でもオリンピックの金メダリストにたいする称賛の様相のなかに残されている。

世界征服と軍団の「私兵」化

ローマは数百年をかけて着実に、サムニウム人との戦い、カルタゴ人との戦い(ポエニ戦争)、そしてマケドニア人との戦いなどをつうじて、イタリア半島を征服し、地中海世界を支配下におさめていった。反旗を翻す人びと、その可能性がある人びとでさえ、ローマにとってはつねに「敵」と認識されたからである。

たとえば、第 2 次ポエニ戦争においてローマに敗戦したカルタゴは、その後にくマケドニア戦争ではローマに友軍として

物資を供給し、支援する役割を担った。だが、カルタゴの復興が速いとみるや、ローマはふたたびカルタゴに戦争を仕掛け、第 3 次ポエニ戦争において都市ごと灰燼に帰するまでの壊滅に追いやったのである。

しかし、その絶えざる征服戦争が、ローマの社会構造をしいに変わらせた。征服地に大土地所有が進み、戦争捕虜を農業奴隷として安価な作物を大量に生産するようになると、それまで兵士の中核を担っていた中小の自由農民が没落し、都市に流入した。そのような、資産をもたない者たちが兵士となり、さらなる征服戦争のエンジンを回した。だがすでに兵士は、ローマのために戦うのではなく、自分を養ってくれる司令官のために戦う集団、いわばプロの軍団となり、これを指揮するローマの有力者たちの「私兵」になっていた。

その結果が、ローマの政治的混乱であり、独裁官カエサル、そして元首アウグストゥスの出現、共和政から帝政への移行であった。

パクス・ロマーナの姿

歴代皇帝によるローマの拡張政策は、しかし、いわゆる五賢帝のうち 3 番目のハドリアヌス帝の治世に辺境防衛政策へと切り替わった。兵士の大半を辺境の属州出身者が占めていった。かれらはその地に駐屯し、周辺部族にたいしては焼き討ち、家畜を強奪するなどして残忍酷薄に対処しながら、同時に、建設工事監督、収税官、警察官としていわば「地方公務員」の役割をも担っていった。除隊後には「退職金」も支払われた。新約聖書には、イエス・キリストに十字架を運ばせる百人隊長がえがかれている。

このように、すぐれた組織をもつ軍団が、辺境防衛あるいは地方行政を担うことで、都市部には、これまでにない平和と繁栄の時代がおとずれた。

したがって、冒頭のタキトゥスのことばは、この「平和」の守り手であった軍団のおそろしい姿を周辺部族の眼から訴えることで、パクス・ロマーナという、うつくしい女神を相対化しようとしたものだったのである。

博物館実習 VI を実施しました

学芸員養成課程の拡充により、今年度から学術資源研究公開センターでも博物館実習 VI (2 単位) の学生を受け入れることになりました。これまでは基本的に文学研究科においてカリキュラムが決められていましたが、これからは、センターを構成する館園(博物館、植物園、史料館)で分担してカリキュラムを決め、実習をおこない、成績を評価することになります。今年度は、9月1日(月)より5日(金)まで連続講義をおこないました(ただし植物園では講義期間の重複等を考慮して1週間後に開始)。

第1時限目には文学研究科棟 135 講義室に履修登録した学生全員を集め、ガイダンスをするとともに、博物館、植物園、史料館のいずれかの実習上の配属を伝えました。約 30 名の履修学生のうち 3 分の 2 は文学部、残り 3 分の 1 は理学部の学生であったため、各館で実施する実習のテーマをよく理解し、その枠組みのなかで自身の能力を確認し向上に努めることが学芸員の養成に相応しいだろうということで、各館(園)での実習内容がその専攻と大きくことならないようあらかじめ学生の配属を決定しました。

博物館では柳田・小川の担当と西・高嶋・根本の担当の実習の 2 班を作り、それぞれ 7 名、8 名の学生を受け入れて、

前者では考古学と博物館における広報技術について、後者ではフィールドに出て化石の採集と標本登録・撮影技術等の実習をおこないました。

ここではとくに柳田・小川班の実習について報告します。初日はガイダンスのあと川内北キャンパスに移動し、川内 BK 遺跡の発掘調査現場を見学しました。BK とは武家屋敷の略号で、近世の生活用品などが多く出土しますが、縄文時代の狩猟関係の遺構(推定)も発見されています。見学中は埋蔵文化財調査室の藤澤敦特任准教授により解説をしていただきました。午後は片平キャンパスに集合し、同調査室作業室にて出土品の洗浄と分類・整理をおこない、2日目、3日目も同じキャンパス内にある旧制第二高等学校等の石碑の拓本作業をおこないました。



発掘現場を解説する藤澤先生

3日目午後からは主として小川が担当し、施設見学と模擬ニュースレターの制作作業にはいりました。初日のガイダンスのさいに、興味をもったこと、伝えたいとおもうことについてはメモや写真などの記録をとり、積極的に質問して実習における作業の理解を深めるように指導し、その後、新聞等における記事の文章の特徴や作劇法、アカデミック・ライティングなどについて講義して、学生を 3 班に分け、4日目にニュースレターの制作、5日目に発表と質疑応答、最後に講評という流れをつくりました。

ニュースレター制作とは、実習体験を学問的な背景を踏まえて文章と写真等で立体的に再構成し、専門家ではない一般の市民にもわかりやすく伝えるものにほかなりませんが、Adobe Illustrator や Photoshop を使いこなす学生もいて、おおむね期待以上の仕上がりになりました。その成果のひとつを下に掲げておきます。

今回の実習では博物館の柳田俊雄教授が総合プロデューサーとなり、教員との打合せ・交渉から成績の取りまとめに奔走しました。博物館の建物がないため、実習スペースを探したり、また、当時附属図書館が改修中のため文献利用ができなかったりなど苦労もありましたが、創意と工夫で乗りきり、学生に有意義な実習をさせることができたようにおもいます。関係者の方々に改めてお礼申し上げます。

(文/写真=小川知幸)



学生の制作した模擬ニュースレターの誌面



ニュースレター制作のようす

ミュージアムの種を蒔く（前編）

「南三陸フィールドミュージアム」にいこうよ！ の実証実験

2014年9月20日（土）と21日（日）に南三陸町にておこなわれた標記の催しについて、総合学術博物館の佐々木理准教授（古生物学）にその構想をお聞きしました。

編集部 南三陸町での今回のフィールドミュージアムでは、お子さんや親子づれ、それに2日連続で参加される方もいて、たいへん好評だったとのことですね。宮城県では三陸復興国立公園を中心にした復興プロジェクトが進められているようですが、これも関係しているのでしょうか。

佐々木 ありがとうございます。まったく別のもので。このフィールドミュージアムはこれまで取り組んできた子ども夢基金の助成活動の一環なのですが、これまでとは違う意味づけをしようとおもったのです。

編 それはどういうことでしょうか。

資料を活用するしくみ

佐 ご存じのように、南三陸町では東日本大震災で「魚竜館」が被災して大量の自然史資料が流失しました。総合学術博物館は、すぐに文化財レスキューとして現地入りして資料の救出と修復、保存にかかりました。これらの資料はいわば地元の財産ですから、お預かりしたものをいずれは南三陸町に返還して活用してもらおうと考えていました。けれどもミュージアムは再建されないということがわかったのです。

編 返還してもどこかの倉庫に仕舞ったさりになるということですか。

佐 活用するしくみがない、ということです。地方のミュージアムはおそらく観光事



南三陸フィールドミュージアムのチラシ

「地産地研」

佐 文化財レスキューの活動のなかで南三陸町教育委員会の方とも知り合いました。この人が予想以上に動いてくれる。「地産地研」のようなことができないでしょうか、とも言ってくる。南三陸町では、地層を掘るのに重機を使わなければならないところもある。それに地権者との話し合いもありま

佐 もちろん、それもあるでしょうが、自分たちのところに何かいいものがあるということがわかる、ということです。化石にしる、何にしる、価値あるものを自分たちが見つけることができるかもしれない、という予感なのです。

編 今回も館浜北の地層で子どもたちに化石発掘体験をさせたわけですね。

佐 子どもたちが化石を掘り当てたとする。そうすると、もっと出ないかとおもって出そうな地層を探すわけです。出そうな地層を探すには体系的に勉強しなければならない。大人もいっしょに勉強するわけです。いいものが見つければ、値段をつけて売ってもいい。値段をつけるには、また勉強しなければならない。（笑）

編 それが、地産地研ということでしょうか。

佐 いよいよとなれば、施設としてのミュージアムをつくってもいい。そこでみんなで勉強すればいいんですから。重要なのは、地元で取り組むことです。だれか権威のある人がこれはいいものだといっても始まらない。そんなものをありがたがってもしょうがないのです。



“ミュージアムとは、ひとつの「しくみ」なんですよ。”

業の一環として成立していて、あたかも物産館のようになっています。子どもたちを集めて標本の説明をしたり、授業で利用したり、学校の先生が専門家と交流したりということもない。それは人も（異動で）変わりますから、しょうがないのですけども、それよりも、価値発見といいますか、重要な機会がうしなわれていると感じたんですね。

編 動機のようなものですか。

す。そうすると、大学からはなかなか手出しができないのですが、地元の人、しかも行政の人となると、承諾がでる。

編 お付き合いもありますし。（笑）

みちのく博物楽団との関係

編 フィールドミュージアムでは、みちのく博物楽団も協力したんですね。

佐 博物館実習を履修する学生たちを連れて行きました。授業なので指導します。みちのく博物楽団には何も言いませんでした。指導すれば、管理しなくちゃならない。(笑) そういう関係ではないし、博物楽団は自発的に行動する団体です。何をしたら楽しいか、自分で気がつくのです。指導したら共倒れですよ。

編 なるほど。その意味では、一貫して

ますね。チラシでは、歌津には三疊紀の世界へ通じる「むかし窓」があるみたい、南三陸町の「ふしぎ宝箱」だね、というキーワードを使っていますが、じつはそれで気がつかなくちゃいけないわけですね。

佐 なぜミュージアムがあるのか、ということです。施設とか、建物とかではありません。ミュージアムというのは、ひとつの「しくみ」なのです。

編 どういうことですか。

実証実験

佐 「発見」のためのしくみ、現代社会の再生のためのしくみなのです。このしくみがうまれるかどうか、それを実証的に実験しようとしたのが今回の南三陸フィールドミュージアムだったのです。

編 それで、これまでとは違う意味づけということですね。ありがとうございます。では、ミュージアムは現代社会にどのようにかかわっているのでしょうか。その点をお聞かせください。次号、後編に続きます。

(文／構成＝小川知幸)

博物館の魅力 —— 二枚貝類化石標本データベース

わたしが博物館の学生スタッフとして仕事を始めたのは、2013年の4月からで、まもなく丸2年を迎えます。研究室の先輩が卒業を迎えたため、作業を引き継ぐことになったのがきっかけでした。現在は博物館ホームページ上で二枚貝類化石のタイプ標本を検索することのできるデータベースの制作と、博物館に展示されている水槽の管理をおこなっています。

総合学術博物館には、理学部地質学古生物学教室が開学以来収集してきた二枚貝類の化石が数多く収蔵・保管されています。その長い歴史から、それらの化石のなかには学名の定義に直接関与している担名タイプの標本も多数あります。それらを学外からでも簡単に探すことがで

き、標本の情報と画像を見ることができるようになっているのが、二枚貝類化石標本データベースです。

わたしが引き継いだときは佐藤慎一先生が中心となって作業を進めていました。わたしがおこなったことは、おもに標本の撮影と、それらの画像や情報をホームページ上にアップロードしたり修正したりすることでした。撮影はまず、収蔵庫から目当ての標本を探し出すことから始めました。記録された保管場所のない標本も多かったり、どれがアップロードすべき標本か、記載論文に当たって調べる必要があったりと、撮影にいたるまで予想以上に苦労しました。撮影中も、貴重な標本を傷つけないよう注意を払ったり、顕微鏡を用いて小

さな標本を撮影したりと、標本がもつ種の特徴をきちんとわかるようにしました。

撮影した画像や整理された各種二枚貝類の化石の情報をひとつずつアップロードしていくのも仕事のひとつです。すでにアップロードされている情報にかんしては誤った情報が記載されていないか、標本の画像は適切かなど、ひとつひとつデータとホームページ上の情報を照らし合わせる作業をしており、それは今も続けています。戦前に記載された標本も数多いため、データが不完全であったり化石標本が紛失していたりと完璧とはいきませんが、このデータベースが少しでも活用されるよう、今後も改善を進めていきたいとおもっています。

(文／写真＝山中崇希)



二枚貝類化石標本データベース



撮影のため収蔵庫から二枚貝化石を取り出す

東北大学総合学術博物館 Information



ふくしま震災遺産保存プロジェクトへの協力をはじめました

東北大学総合学術博物館では、福島県立博物館などで組織する「ふくしま震災遺産保存プロジェクト実行委員会」に、これまでおもに宮城県内で進めてきた震災遺構 3D クラウドデータアーカイブの経験をもとに、福島県内に残された震災遺構の 3D アーカイブ作成の協力をしています。現在、双葉郡富岡町、同浪江町などに残されている、津波で被災した建物や地域などについて、両町の協力のもと 3D データ化に着手する準備を進めています。

福島県は、東日本大震災では津波だけでなく原子力災害も発生し、将来に残すべき教訓が数多くあります。これらをさまざまなかたちで将来へと継承し、利活用を進めていくプロジェクトに協力することは、被災地にある大学博物館の重要な使命のひとつと考えています。

(文/写真=鹿納晴尚)



福島県浪江町 請戸漁港 漁協建屋

理学部自然史標本館

●ご利用案内

総合学術博物館の常設展示は理学部自然史標本館にて行っています。下記は理学部自然史標本館のご利用案内です。

●入館料

大人 150円/小・中学生 80円
(団体は大人 120円、小・中学生 60円)
幼児・乳児は無料、団体は 20 名以上です。

●開館時間

午前 10 時から午後 4 時まで

●休館日

毎週月曜日*1、
お盆時期の数日*2、年末年始*2、
電気設備の点検日(例年 8 月最終日曜日)*2

*1 月曜日が祝日の場合は開館、祝日明けの日が休館となります。
*2 日にちが確定次第ホームページにてお知らせします。



●交通手段

■仙台市営バス

- (1) JR 仙台駅西口バスプール 9 番のりばより、[719 系統](青葉通・理・工学部・仙台城跡南経由 動物公園循環)に乗り、「理学部自然史標本館前」で下車。徒歩 1 分。所要約 20 分。
- (2) または同じく 9 番のりばより、[710 系統]か [713 系統]、[715 系統](宮教大、青葉台、成田山行き)に乗り、「情報科学研究科前」で下車。徒歩 4 分。所要約 25 分。

■仙台市観光シティーバス「ふるふる仙台」

JR 仙台駅西口バスプール 15-3 番のりばより乗車。「理学部自然史標本館前」で下車。所要約 30 分。

総合学術博物館の ホームページもご覧ください



東北大学総合学術博物館のホームページ
<http://www.museum.tohoku.ac.jp/>

東北大学 総合学術博物館 THE TOHOKU UNIVERSITY MUSEUM

〒980-8578
宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉 6-3
tel/fax. 022-795-6767
©The Tohoku University Museum

Omnividens [オムニヴィデンス]

Omnividens はラテン語で、英語の all-seeing に相当し、「普く万物を観察する、見通す」の意味をもっています。